

### 明治維新を起こした幕末教育塾

#### 適塾と松下村塾

明治維新に繋がる幕末期、吉田松蔭が教えた松下村塾と緒方洪庵が教えた適塾は、後に日本を背負う優れた人材を輩出したが、両塾は全く対照的な教育方針を実践した。松下村塾が小人数の生徒に徹底した個性化教育を行ったのに対して、適塾では生徒の自主性にまかせる放任主義教育を行った。

適塾は大広間で激しく競い合う蘭学教育を通して、基礎的な教養を身につけさせた。自己啓発によって、内に秘めている能力を掘り起こし、個性・才能を伸ばしながら、専門職への道、自分に一番適した道を自分で選ぶように指導したのである。あえて自由競争であるが、自分との競争、自分が怠慢になろうとする心を抑えつける自分との闘いである。自分に打ち勝つと同時に、他人にも打ち勝ち、努力する才能を養う、それが適塾の教育法だったのである。

一方、松下村塾のマンツーマン教育の真髄は、教科書にもある。松蔭はひとりひとりに別々な教科書を与えた。たとえばある者には日本の歴史を、ある者には兵学を、ある者には経済学を、ある者には地理を教えていたという。塾生たちの顔ぶれは種々雑多で個性的、侍の子、農民、商人、足軽の子もいた。松蔭の教え方は「人を見て法を説け」であった。松蔭は講義室での講義だけでなく、共に働き共に学んだ。又、松蔭は、塾生たちの長所を見抜く名人でもあった。伊藤博文は「周旋家になりそうな」つまり他人との交渉が上手だと評し、萩の乱の指導者、前原一誠は「誠実人に過ぐ」そして高杉晋作の長所は「陽頑」、陽気だが他人の意見を聞かない頑固な性格をしていると見ていた。

二つの塾で教育が続けられたのはあまり長い間ではなかったのに、時代を動かすたいへん優秀な人材を輩出できたのは何故だろうか？

適塾では、自由な雰囲気の中で自由競争によって才能を伸ばし、自学自習の意欲のもの、努力した者は上に行くシステムがあげられる。また洪庵には、塾生に対する、優しく深い人間的な愛があった。教え込んだり押さえつけたりせず、愛によって塾生たちの潜在的な能力を引き出す教育に心血を注いだ点も指摘できる。

松下村塾では、松蔭の感性に尽きる部分が多い。松蔭は人間に対する優しさ・誠実さを尽くす人であった。どんな塾生たちにも限りなく優しく、長所を見ぬき、ほめてやる。この繰り返しが大きな成果に繋がった秘密ではないだろうか。と同時に、非常に強烈な情熱、激しいものを内にもっていた。

**現代の教育は、明治維新以来の教育体制の延長です。**

**明治維新の時代には、富国強兵という国策に合うように官僚の育成・産業人の育成が急務でした。西洋の学問体系を身に付けることが教育のあり方だったのでね。**

**つまり、知識の習得が一番重要だった訳ですね。**

**では、激変する現代では、どのような教育のあり方が求められるのか？**

**知識ではなく、変化に対応出来る智恵や新しい価値を創造する能力が必要となっております。**

**今こそ、幕末の教育の原点である思想や哲学を学ぶことが求められていると感じます。**

**いかがですか？ あなたはどう感じていますか？**